文化芸能

毎月最終土曜日に掲載予定

シャガール展　三次元の世界

ビルディング・ロマンス

心の底の原風景 大切に

シャガールはロシア出身の画家で、主に二十世紀のフランスで活動した。一九一五年、彼の二十八歳の誕生日に、恋人のベラは花束を手に彼のアパートを訪れた。はじめての出会いから数年、第一次大戦による困難も乗り越えて、ようやくふたりが結婚する数週間前のことである。シャガールは、文字通り宙に舞い上がる気持ちであったに違いない。

「誕生日」（一九二三年）は、彼の弾む心のうちを、率直にそのまま描き出している。彼の両足は床を離れ、首は急旋回してベラに口づけし、彼女は驚いて目を見張る。実際にはあり得ないポーズだが、彼の気持ちには忠実に描かれているのである。シャガールは、自分の心の深いところに残った原風景を大切にして、生涯にわたって繰り返し描いた。空に浮かぶ恋人たちや花束は、故郷の村の家や動物と並んで、彼の作品には後々まで登場する。

他の二十世紀の作家たちと同じく、シャガールの芸術は、壁に飾る油絵という旧来の枠にはおさまりきらなかった。パリのオペラ座の天井画や教会のステンドグラスを手がけたのも有名だが、この展覧会では、人物が画面から飛び出してきそうな絵と並んで、石彫と陶芸の作品が集められて見どころになっている。

マルク・シャガール「誕生日」1923年、油彩／キャンバス　AOKIホールディングス蔵　©ADAGP,Paris&JASPAR,Tokyo,2018ChagallRE2837

立体的な作品になっても、その自由奔放な作風は変わらない。むしろ、シャガールの世界は空間の中に解き放たれることで、新しい生命を得ているように思われる。恋人たちはもちろん、おなじみの動物たちも旧約聖書の登場人物も、荒削りのごつごつとした彫刻の形を得て、存在感を増す。あまり知られていなかった、シャガールの違った魅力を教えてくれる展覧会である。

（浅野和生＝愛知教育大教授）

▶ 名古屋市美術館　問052(212)0001　2月18日まで